

# 介助犬の本当の在り方



岡山市・三軒小5年 内田 昊利

岡山県内第一号  
ダイキチ



介助犬 活動中

ボクの名前はダイキチ。お家のラブラドルトリーで、今年5月から岡山県岡山市東区西の藤原さん(48)の家で暮らしています。髭のある黒い毛が自慢だよ。  
ボクは特別な訓練を受けた介助犬。脚から下上部から先が自由に動かないために、膝と肘を補助するために膝と肘と手を動かしたり、着替えを手伝っていたりしている。家にいる時も出かける時も一緒に「ダイキチのおかげで、安心して暮らしている。ありがとう。」

2017年5月28日付 さん太タイムズ

岡山県初の介助犬「ダイキチ」のパートナーの藤原さんは、僕の友人のお父さんだ。これほど身近に介助犬がいるにも関わらず、僕は介助犬について深く考えたことがなかった。

介助犬とは、体の一部が不自由な人の手助けをする犬だ。その仕事は、落としたり物を拾ったり、指示したものを持ってきたりなど多種多様だ。一見、動物に仕事をさせかわいそうだという意見も聞かれる。僕も、実際に介助犬にインタビューさせてもらった。藤原さんが介助犬を知ったきっかけは、愛知県にあるリハビリテーションセンターで、介助犬のユーザーを見たことだった。後日、雑誌で介助犬の募集を知った藤原さんは、実際にインタビューさせてもらった。

こえてきそうだが、主にラブラドルトリバーなど狩猟犬がなっており、物を拾うことが得意な犬種なので、犬にとっても嫌なことではないのだ。僕は、実際のユーザーである藤原さんにインタビューさせてもらった。

藤原さんが介助犬を知ったきっかけは、愛知県にあるリハビリテーションセンターで、介助犬のユーザーを見たことだった。後日、雑誌で介助犬の募集を知った藤原さんは、実際にインタビューさせてもらった。

評 寸

「多くの人に介助犬の可能性を知ってほしい」という思いが伝わってきます。

藤原さんの生活は、とても便利になった。でも、それだけではない。介助犬と一緒にいると楽しいし、かわいくて、いやされる。介助犬の可能性はまだまだありそう。そんな素晴らしい介助犬だが、数も少なく、まだまだ一般に知られていない。介助犬を必要とする人に思うように届かないのが現状だ。だから、この記事を書きかけに知ってもらい理解され、一人でも多くの人の元に介助犬が届いてほしい。

記事に掲載された介助犬のパートナーにインタビューし、生活の変化や現状を具体的に書き込んでいま